

4. 宗門改帳から読む近世都市京都のライフコース

浜野 潔（関西大学経済学部教授）

ただ今、ご紹介いただきました関西大学の浜野と申します。学生時分より、ここにおられます速水融先生のご指導を受け歴史人口学に取り組んでまいりまして、ちょうど30年になりました。歴史人口学という学問は、歴史の表舞台には登場しない普通の人びとの一生を描き出すことをもっぱら研究の目的としております。たとえば、どこで生まれたのか、何歳で結婚し、何人子供を生んだのか、結婚はずっと続いたのか、離婚したのか、あるいは何歳まで生きのびたのかといった情報を丹念に集めて、分析を行います。現代であれば、プライバシーの侵害として問題になるようなことをほじくり出すのが仕事でして、そういう面白さを知ってしまうとやめられなくなり、30年続けてきました。

本日は、「宗門改帳から読む近世都市京都のライフコース」と題しまして、私が10年くらい研究を進めてきた京都の歴史人口学についてお話させていただきます。ご承知のように江戸時代には「三都」と呼ばれ、抜きん出て大きな都市が3つありました。すなわち、江戸、大坂、京都です。18世紀になると江戸は100万人以上、大坂、京都も30万人台の人口を擁し、世界的に見ても非常に大きな都市だったということが知られています。このような大都市に住む人びとがどのような一生を送っていたのか、歴史人口学者は、こういったことに関心を持つわけですが、残念ながら江戸と大坂は戦災で大きな被害を受けたため、史料の残り方がよくありません。しかし、京都の場合、もちろん何度も火事はありませんが、空襲の被害はほとんどありませんでしたので、今日でも史料の残存度が江戸、大坂にくらべ格段に高くなっているわけです[スライド1]。

もちろん、歴史人口学者が史料として使っている「宗門改帳」も多数発見されております。不思議なことに、大都市の宗門改帳には年齢が記載されていないものが多く、京都でも途中までは年齢が書かれていないという欠陥があるのですが、天保14年、西暦で申しますと1843年からきちんと年齢が書かれるようになりました。おそらく、天保改革の時、都市の住民登録が強化されたことと関係があるのだと思います。この点で、幕末まで年齢記載がなかった大坂の宗門改帳よりも優れた史料だということができます。

京都：都市人口史料の宝庫

- 戦災に遭わなかったため、三都の中では史料の残存度が江戸・大坂より格段に高い
- 宗門人別改帳に天保14(1843)年から年齢を記載するようになる
 - cf.大坂では幕末まで記入なし

<スライド 1>

こうした史料を分析する場合、大きく分けて「時系列データ」として見る場合と「単年データ」として見る場合があります。時系列データというのは、ひとつの町や村で何年にもわたって宗門改帳が残されているようなケースであり、たとえば京都では、四条通に面した立売中之町の史料を使った速水先生の研究などが代表的です。また、私も西陣の町の研究などを発表しております[スライド2]。

もうひとつの単年データというのは、同じ時期の宗門改帳をたくさん収集して、人口構造や世帯構造を比較しようという研究です。これも農村に関しては黒須里美先生を中心とした全国レベルの研究が進んでおり、人口や世帯の構造に関する地域差が解明されつつあります。このやり方を都市の史料に応用すれば、都市住民の人口や世帯の構造を明らかにできると思います。今日報告するのは、幕末の京都の史料を集めた分析であり、またその結果を黒須先生の農村の研究と比較することによって、都市と農村の違いというものも見てみたいと考えております。

さて、ここに掲げました地図は幕末における京都の町の範囲を表しています[スライド3]。少し上のほうに四角い形があります。これは京都御所になります。それから、真ん中あたり少し左側に二条城が書かれています。そのほか、南北それから東西に主要な街路が書き込まれています。なお、年代は1860年前後を基準にしています。この年代ですが、京都では1864年に蛤御門の変という戦があり、大きな火事が起こりました。この火事では、京都の南半分が焼けてしまい、人口が激減しました。したがって、ここでは、火事の起こる前の史料に限定して、見ていくことにしました。

その結果、この地図には点で示してありますが、1860年前後の時期に15の町の宗門改帳が京都では残されていること

宗門改帳分析の2つのタイプ

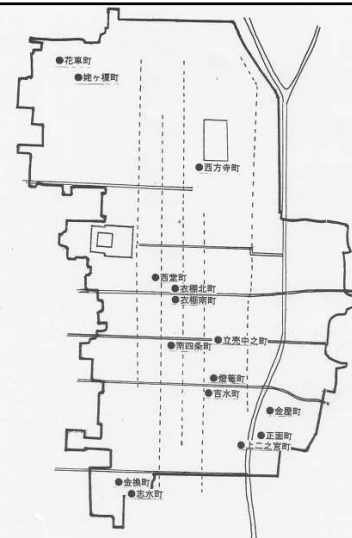
- 時系列データ
 - 京都では「立売中之町」「南・北衣棚町」「花車町」「西堂町」など
- 単年データ(クロスセクション・データ)
 - 同一年代のデータを横に広げる

<スライド 2>

幕末京都の単年データ

- 1860年前後
(元治大火の前)
- 15町・599世帯・
2362人
- 平均世帯規模は
3.94人

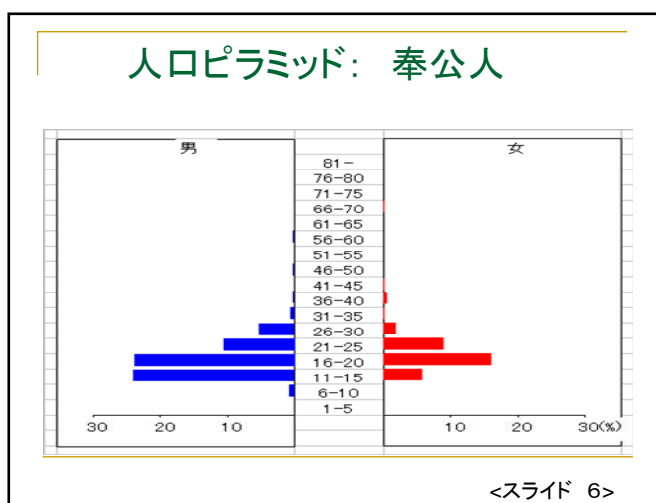
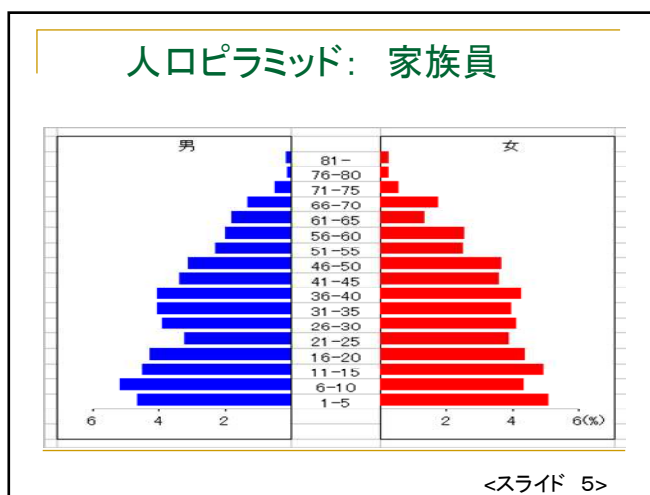
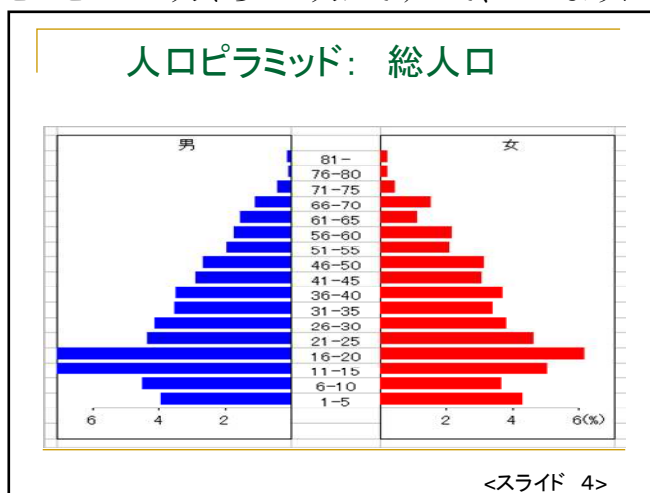
<スライド 3>



が分かりました。京都全体では当時、1700 ぐらいの町がありましたので、全体の 1% 弱ぐらいのサンプルサイズということになります。このデータベースには、世帯数にして 599 世帯、人口では 2362 人の情報が集められています。都市の宗門改帳というのは町単位ではたくさん残っていても、一つの町はせいぜい 200 人ぐらいの人口ですので、このように多くの町の史料を集めることによって、より信頼性のあるデータが取れると思います。

また、一口に都市といっても、やはり中心部とそれから周辺部の違いがあります。また、例えばこの地図でいうと、左上のあたりはもっぱら西陣織を生産している地域で、職人の多いところです。それから、ここに現在繁華街として知られる三条、四条という通りがあります。江戸時代にもこのあたりは同じように賑わっていた場所でした。今回のデータには、中心部から郊外まで様々なタイプの町の史料が含まれております。もちろん、現代のようなランダムサンプリングではなく、データはまったく史料の残り方に依存しています。とにかく、少しでもよいデータにするためにサンプルを増やした結果、集まったのが 15 町分ということになりました。

このデータを使うと、まず単純な計算ですが、一つの世帯、つまり家 1 軒に住んでいる人は大体 4 人ぐらいであるということが分かります。さらに、この人口をもう少し年齢別に分けてみると、人口ピラミッドというのを描くことができます[スライド 4]。先ほど高橋先生のところでも、たしか女性



の若いところが飛び抜けて多かったグラフがあったかと思います。この京都の人口ピラミッドで特徴的なのは、男女とも10代のところが非常に突出しているということです。

実は、家族の人口だけを取ると、そこは突出しているのではなく、むしろ少し引っ込んでいます[スライド5]。突出の原因は、この年齢層に多かった奉公人です[スライド6]。史料には「下人」であるとか「下女」であるとか書かれています。また、下人がさらに「小者」という身分、つまり一般には小僧さんと呼ばれるランク、それから出世すると、その上の「手代」というランクに分けて記載されることもあります。このような奉公人というのが、当時の京都には非常に多かったことがわかります。

京都の場合、女子に比べて男子の奉公人のほうが数としては多くなっています。しかし、さらに細かく見ると、西陣へ行くと女子の奉公人の数が多く、京都の四条とか三条の商家へ行くと、ほとんどが小僧さん、つまり小者というランクの男子奉公人が中心になっていることが分かってきました。

また、男性の場合は大体11、2歳のところから奉公が始まりますが、女子の場合は少し遅れて15歳前後のところから始まる人が多いことも分かります。このように年齢別の人口のもっとも大きな特徴は、今申し上げた奉公人が、10歳から25歳ぐらいのところに分布していたということになります[スライド7]。

さらに、この奉公人の出身はどこかということも知ることができます。出身地は生国という形で書かれており、大半は京都を含む山城国の出身でしたが、それ以外の、つまり遠方からやってくる他国出身の奉公人が、男子の場合22%含まれています。また、少し意外ですが、遠方の出身者は女子のほうがかえって多く、27%くらいになっています。こうした奉公人の中には、信濃国から来ている者など相当遠くから来ているものもありますが、数の上ではやはり近畿が多く、それから若干の者が濃尾地方から来ているというような形になります。

5歳未満の子供で生国が山城国以外であるもの、つまり、他国で生まれたと思われる子供の数ですが、これは3.6%に留まります。大半の人は京都で生まれたのであろうということ、言い換えれば、家族で他国から京都に引っ越して来た人は、それほど多くはなかったということが想像できます。恐らく、京都への転入者は家族単位で来ることは少なく、奉公人としてまず入り、その中の一定数が残っていったのではないかということがうかがわれます。ただ、この時期、人口は減っておりますので、外から入ってくる

年齢別人口

- 奉公人は10-25歳に集中する
- 奉公人のうち、山城国以外の出身者は、男子が22.0%、女子が26.8%
- 5歳未満で山城国以外の出身者は3.6%
 - 家族単位の流入は少ない

<スライド 7>

人の中で京都に残った人はそれほど多くはなかったのかも知れません。

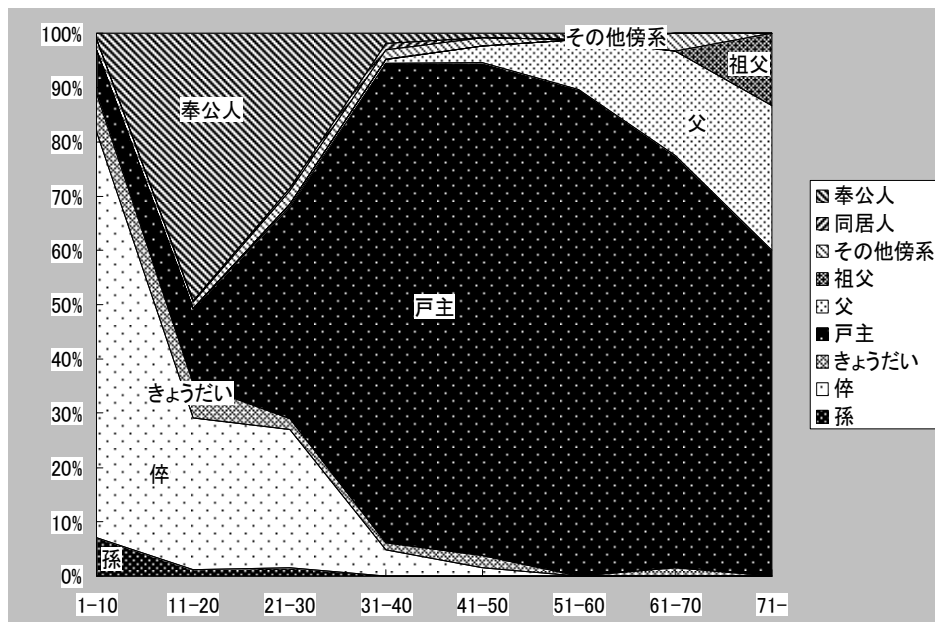
さらに、この数字を年齢別、続柄別に見たらどうなるかということを示したのがこの「年齢別続柄の変化」というグラフです[スライド8]。これは何をみているかという、年齢ごとに世帯内でどのようなポジションにあったかということが示されており、ここからライフコースの軌跡を明らかにすることができます。

まず、男子の場合ですが、「孫」というカテゴリーは意外に少なく、多くの者が「倅」からスタートします。次に、「奉公人」というポジションが、10代を中心にくさび状に出てまいります。つまり、子供は10歳ぐらいから、いったんは奉公に、つまり他人の家に行くわけです。それから京都の場合、その後は「倅」というポジションは急速に減ってしまい、すぐに戸主として独立する男性が非常に多かったことが分かります。さらに、40歳ぐらいから世帯内の地位は「父」に変わり、少しずつ息子に跡を譲っていきます。最後には数は多くありませんが、「祖父」というポジションが出てまいります。これが男性の年齢を追っていったライフコースということになります。

女性についても、同じようなことを書くことができます[スライド9]。やはり同じように、「孫」から始まって「娘」となるわけですが、奉公人の割合というのは、男子に比べると少し少なくなっています。その後は、「嫁」というポジションも若干ありますが、いきなり戸主の「妻」になる人が圧倒的です。中には「戸主」というポジションもありますが、これは、主として妻であったものが夫の死亡によって戸主になるというケースです。また、後のほうになると、1人住まいの女性も増えてきて、こういうケースも戸主というようになるわけです。

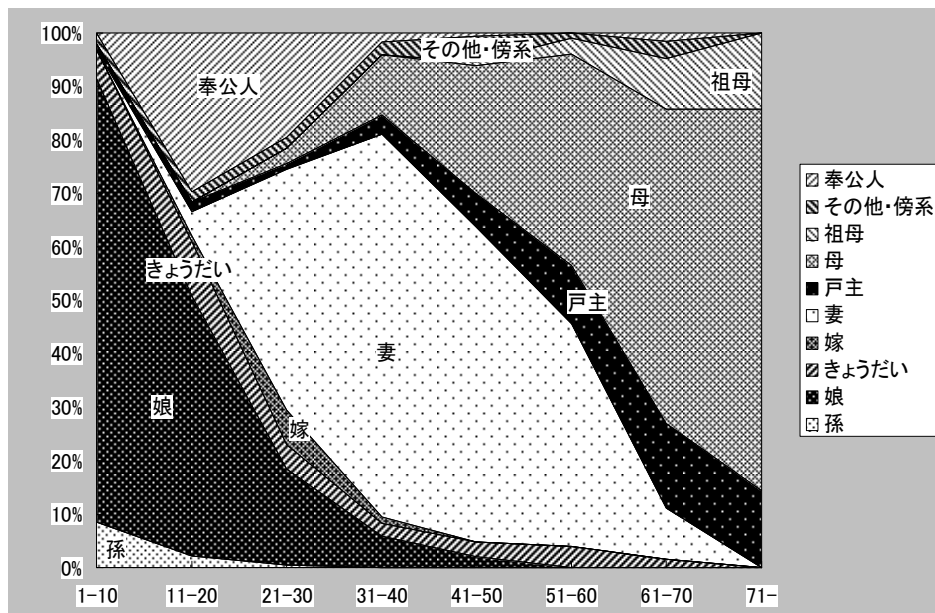
女性の場合は、その次の「母」というカテゴリーが面積の上では「父」よりも広がっております。さらに「祖母」というのも、一定の広さを持っております。これに対して、男性の場合、「父」は小さく、「祖父」はさらに小さくなります。これが、男女別に見たライフコースということになるわけです。

年齢別続柄の変化： 男子



<スライド 8>

年齢別続柄の変化： 女子



<スライド 9>

この続柄の変化を農村と比較してみるとどうなっているでしょうか。今までの歴史人口学の研究で分かっていることは、日本の農村というのは基本的に直系家族というのがルールになっているということです[スライド 10]。直系というのは、祖父母、その下の父母、それから子供という縦の系列のことです。祖父母がもし戸主であ

れば、息子の代とそれから孫の代ということになります。いずれ、どこかで戸主の地位が譲られて、祖父、そして戸主、そして息子、娘というような、つまり3世代縦につながっていく形です。一方で、横につながるということはあまりありません。つまり、その中に叔父とか叔母とか、甥とか姪というのが入ることは非常に少ない、というようなことが分かっております。

では、都市と農村のデータを実際に比較してみると、どのようなことが分かるのでしょうか。そのためには先ほどのグラフを、比較しやすいように単純化する必要があります。ここでは、世帯のメンバーを核家族、つまり戸主、配偶者、子供と、それ以外のメンバーに分けて、その構成を比較してみます[スライド 11]。現代は核家族化しておりますので、皆さんがお住まいの家では、核家族のメンバーのみである家が多いと思います。例えば両親と子供が一つの家に住み、祖父母は、また別の世帯を持っているというような世帯が多いのかと思います。では、江戸時代の場合、世帯の構成はどうなっていたのでしょうか。

この表は、核家族を除く世帯の構成がどの程度あったかということを表したものです。ここではそれぞれ数字を、100世帯あたりの数に直しております。例えば、幕末の農村では100世帯当たり137人の核家族以外の方が住んでおりました。つまり、1世帯平均1.4人程度の核家族以外のメンバーがいたということになります。そのメンバーの中心は、まず戸主の

世帯構成の比較

- 日本の農村は 直系家族がルールとなっていた
- 京都のような都市ではどうか？
 - 核家族世帯員(世帯主、配偶者、子ども)以外の構成メンバーをしてみる

<スライド 10>

核家族を除く世帯構成(1):100世帯あたり

	幕末農村*	京都	1920年 (郡部)
親	37	33	29
子どもの配偶者	16	3	14
キョウダイ	33	18	12
キョウダイの配偶者	4	1	1
キョウダイの子	8	3	3
孫	25	7	28
その他の親族	14	4	4
合計	137	70	91

*真壁、多摩、久居、越前、備中の平均(黒須 2006)

<スライド 11>

親であり、それから次にキョウダイ、すなわち兄、弟、姉、妹がおります。それから孫、子供の配偶者、すなわち嫁、あるいは婿というカテゴリーが続いています。

京都について同じ計算をしてみますと、まず核家族以外の世帯の構成員というのは、0.7人ですから、農村の半分であったこととなります。全体としても世帯規模が小さいので、この数が少ないということは、ある意味当然のことですが、問題はその中身がどうなっていたかという点です。戸主の親の数を見ると、それほど違いはないことがわかります。キョウダイは少なくなっていますが、これは、どんどん奉公に出てしまうということを反映したものでしょう。孫というカテゴリーは、京都の場合は非常に少ないということも特徴の一つです。

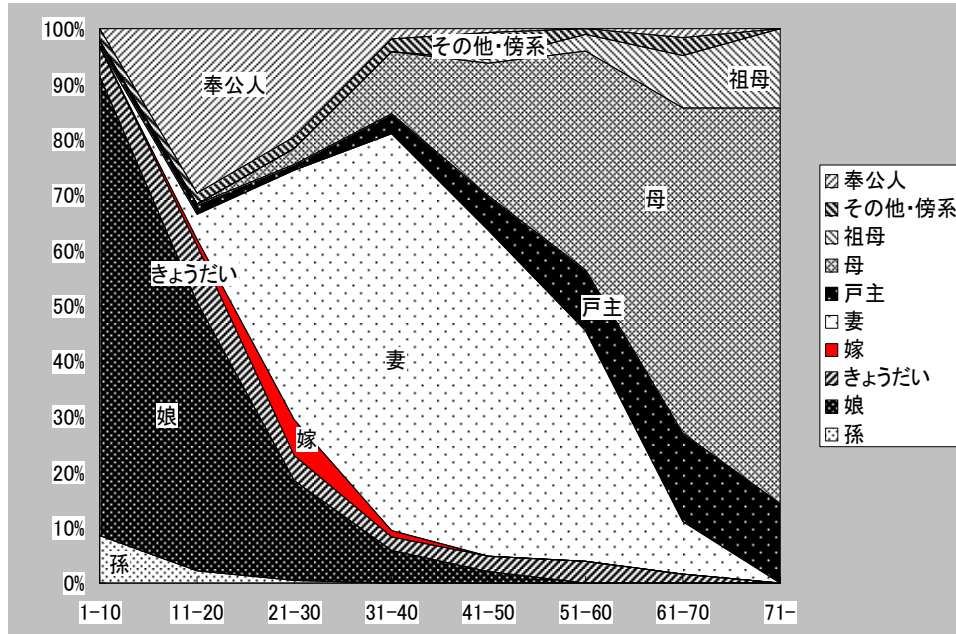
しかし、農村に比べて一番目立った違いは、「子供の配偶者」というポジションの人が、京都の場合、非常に少なかったということです。農村に比べると、4分の1に過ぎませんでした。「子供の配偶者」とは何だったかということも、もう1回確認しますと、要するに「嫁」と「婿」ということになるのです。

江戸時代と現代の間の近代ではどうなっていたのか、ここに1920年の最初の国勢調査で当時、郡部だったところを取り出したデータも掲げてあります。つまり、大正時代の農村のデータということになります。これを見ると、核家族以外のカテゴリーは100世帯あたり91人、つまり1世帯当たり0.9人になりますので、江戸時代の京都の数にかなり近い数字です。しかし、今度は中身の割合を見ると、実は江戸時代の農村と非常に似ているということがわかります。つまり、親と孫が多くなっており、また、子供の配偶者が、江戸時代の農村とほぼ同じくらいいます。つまり農村のデータは、近世であっても近代であっても、大体3世代が縦に重なるという世帯構成が一般的であったということになるわけです。

そこで、先ほど見た女子の年齢別続柄の変化というグラフをもう1回見てみたいと思います。このグラフの「嫁」のところに注目すると、非常に細くなっているということが明らかです[スライド12]。つまり、京都では、人生の中で「嫁」というポジションを経験する確率が、農村のデータに比べて極端に少なかったということがわかります。これは江戸時代の世帯について考えると、都市の場合は、すでに現代に近いようなライフコースがあったということを表しております。

一つだけ注意したいのは、この「嫁」というカテゴリーは、本当はもっと少なかったということでもあります。といいますのは、京都の宗門改帳には本来いるはずの「婿」が、「婿」という名前で出ないのです。婿は史料の上では実子と区別なく「倅」と書かれております。もし、宗門改帳が年代を追える時系列データであれば、「倅」と書いてある中に「養子」が混じっているということが分かるのですが、このような単年データではそれを区別できません。したがって、この「嫁」という中には、本当は実子である「娘」も含まれていることとなります。したがって男性のところでは、「婿」というカテゴリーが出てこないのです。

嫁のいない世界？



<スライド 12>

ということで、今日のまとめなのですが、京都の世帯を見ると「親」の割合はそれほど少なくなかった、ということを確認しておきたいと思います。したがって、直系3世代の家族が基本的なルールであったということと言えます。ただし、嫁とか婿、孫というのが非常に少ないということです [スライド 13]。

京都のライフコース

- 親の割合は農村と大差なく、直系家族が基本的なルール
- ただし、「嫁・婿」「孫」のカテゴリが非常に少ない。

<スライド 13>

なぜ嫁とか婿、孫が少ないのかということなのですが、恐らく都市の場合、居住形態の制約というのがあります。つまり、農村に比べれば当然のことながら家が小さいわけです。そうすると、一時的な別居志向があったのではないかと思います。史料を見てゆくと、年を取ったから娘の家、あるいは息子の家に同居するというような記載事例、あるいは、世帯の中に親が途中から入ってくるという事例が、かなりたくさん出てきます。したがっ

て、ライフコースの中で別居もあれば、再び同居するということもあったように思われます。ちなみに、比較的広い家に住んでいた家持の世帯と、より狭い家に住んでいた借家の違いを見たのが次の表です[スライド 14]。ここでは、予想通り、核家族的な傾向は借家の方がより顕著になっていたということが言えます。

もう一つ、嫁というカテゴリーが少ないのは、実は親が早く引退していたからだという可能性もあります。親が引退すれば自分は「戸主」になり、「嫁」だった人は「妻」になり、親が「父」、「母」になるわけです。実際に戸主の平均年齢を調べると、京都では農村より5歳ぐらい若くなっており、隠居年齢が早かったことが裏づけられました。

したがって、都市において嫁が少ないというのは、二つの原因によって起こったのだということが言えると思います[スライド 15]。一つは別居志向、もう一つは戸主権を早く譲ったということだと思われます。ただ、この家を譲るというのは、あくまで宗門改帳の上での筆頭者の交代を意味していますので、では、家の実権がどうなっていたのかというような点は、例えば民俗学など、いろいろな研究の成果を踏まえて考えなければならない課題となってくるのでしょう。

今日は、京都という江戸時代の都市を事例にしまして、宗門改帳から分かる研究の一端を紹介させていただきました。ご静聴どうもありがとうございました。

核家族を除く世帯構成(2):100世帯あたり

	家持	借屋
親	37	32
子どもの配偶者	6	2
キョウダイ	22	17
キョウダイの配偶者	2	0
キョウダイの子	6	2
孫	17	4
その他の親族	5	2
合計	95	59

<スライド 14>

なぜ、嫁は少なかったのか？

- 借屋では特に「嫁・婿」のカテゴリが少なく、居住形態の制約による**一時的な別居志向**があった
- 平均戸主年齢は40歳。農村より5歳程度若い。**戸主権が早く譲られるため**、嫁が妻になるのも早かった。

<スライド 15>